

2009年1月16日

夕張レポート<第9回>

～まもなく出発！タイムリー研修～

東京都職員研修所では、平成20年度タイムリー研修「地域での活動を通じて都政を考える」と題し、昨秋に続き、1月20日より5日間、都若手職員10名を夕張市へ派遣することとしました。

また、猪瀬副知事の発案により、今回の研修には大阪府、広島市からそれぞれ2名の職員の方が同行し、厳しい財政状況の夕張市で都職員とともに、高齢者宅の生活通路や公共施設周辺の雪かきや、夕張再生市民会議を通じて地域住民や夕張市職員との意見交換を行います。

出発を控えた1月14日、都庁第一本庁舎25階会議室で行われた事前研修の様子をお届けします。

応募したきっかけ

夕張でどんなことをしたいか、と押元職員研修所長からの問いかけに対し、「報道だけではわからない夕張市の厳しい実情を肌で感じたい」「現地の市民や職員の方々の生の声を聞きたい」という答えが目立ちました。



秋の研修内容等を受け、研修生は各自で書籍やインターネットなどを使って情報収集を行っているとのことで、「夕張は究極の現場ではないか」「行政の立つべき位置は何なのか」と自ら課題を掲げ、現地で体感し、それを都政に活かしたいという意見が多くありました。また、夕張市職員や研修生同士など横のつながりで人脈を広げ、さまざまな人との出会いで視野を広げることや、研修中のマスコミ対応や研修後の報告やプレゼンなどの貴重な体験が自らの成長に繋がるとの意見もありました。

大阪府職員は、橋下大阪府知事のもとで「財政再建プログラム」に取り組んでいる最中であり、「大阪は(今回の研修参加者の中で)一番財政再建団体になる、という危機感を持っている。今年はさらに税収が減少しており、大変な状態である。危機感をより現実的に捉えていきたい。」と意気込みを述べました。また、財政規模の縮小に伴う行政サービス低下について、「夕張市の職員がどのように市民の皆さんの理解を得ようとしたのか、市民と行政のありかたを見て、感じて、今後の仕事に活かしたい。」と語りました。



秋のタイムリー研修生からメッセージ

秋のタイムリー研修で夕張に派遣された6名の若手職員から、今回の研修生へ「事前に書籍やインターネットで夕張市に関する基本的知識を勉強してから行ってほしい」「現地の人々と積極的にコミュニケーションをとってほしい」「研修後、周囲の方に夕張のことを惜しまず伝えてほしい」「先入観を持たず臨んでほしい」「東京都だったらどうする、自分だったらどうする、と常に考えて行動してほしい」「現地ではマスコミ対応など、日頃体験したことのない貴重な体験をする。東京都の代表としてメッセンジャーとして思いを伝えてほしい」などさまざまなアドバイスが送られました。



先輩として秋の研修生からアドバイス

事前研修参加前にそれぞれが抱いていた漠然としたイメージがより具体化され、出発を控えた研修生の表情も引き締まりました。

夕張市派遣・鈴木さんによる講義

雪によりフライトが遅延し事前研修の参加が危ぶまれた鈴木直道さんも無事到着し、研修生らへ講義を行いました。

夕張市の歴史や破綻に至った経緯を解説し、厳しい寒さの夕張の現状を伝えました。年収ベースで4割カットという厳しい状況下で一緒に働く夕張市職員に対し、「モチベーションを保っていくのは切実な課題。残っている職員は熱い気持ちを持っている。一生懸命やっている職員の人たちを大切に守って



具体的な実例を交えて
講義を行う鈴木さん

いくというスタンスでないと、今後機能しないのではないか。」と語りました。

猪瀬副知事から激励！

猪瀬副知事は「夕張の実情を肌で感じてほしい。夕張の寒々しい風景は目に焼きつくと思います。夕張の実情を知り、東京都や大阪は夕張からどう見えるか。複眼的な視点を持ち、2つの視点で世界を見るようにしてほしい。」と研修生を激励しました。

また、「雪かきは10分で汗だくになるし、2時間もやったら腰が痛くて大変だから。雪道は滑りやすいから転ばないように気をつけて。」と注意を促し、適度な休憩をとりながら、最終日まで頑張ってもらいたいとエールを送りました。



研修生全員に名刺を手渡す猪瀬副知事